

ホモ主が暁美ほむらと  
ゴールインするだけの  
お話

ryanzi

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なんかリリなのと違って主人公が少ない。

ほむらが百合百合しているのは少し飽きた。

だから書いた。反省はしていない。

# 目次

第1話	1	ホモ的三体問題	56
最初の死	6	ホモ逃げる	63
初デートはVRゲームで	12	ホモがマギウスに助けられる、略してホ モウス	68
ママさんホモった、略してママホモ	19	ホモがマギウスに宣戦布告される、やつ ぱホモウス	72
おやすみ、どうせまた会えるので	25	番外編：あの時間軸は今？	80
資格なきホモはなぜダメなのか？	29		
ホモは実感がまだ湧かない	35		
二百年前のホモから	40		
二百年後の君へ	46		



## 第1話

井宮我修院はホモである。それ以上でもそれ以下でもない。

ホモビのホモと違って、彼は綺麗で女性的な顔で、イケメンだった。

野獸先輩も女だって？あれはホモだから男だぞ？

そんな彼はなぜか死んでしまった。死因はわからない。

ただ背中に痛みが走って、そこで意識を失ったことは覚えている。

彼が死んだとわかったのは、目が覚めた場所がいかにも天国だったからだ。

咲き乱れる美しい花。それは地球上では見つけることのできないようなものだった。

「・・・もう少し生きてかかったけど、ゆっくり家族を待つとするか」

「残念だけど、それはできないんだな」

振り向くと、そこには天使が浮いていた。

「君にはこれから転生してもらうんだ」

我修院はそれがどういふことを知っていた。

クラスの子の一部がそういふ小説を読んでいたからだ。

しかし、ホモが出ないので我修院はそういふのを好まなかった。

「断りたいんですが・・・」

「おやおや、珍しいねえ。どうしてか聞かせてもらえませんか？」

我修院は天使の口調に少しかチンときたが、我慢した。

彼女にもそれは伝わったようだ。やっぱり心を読んでいるのだ。

「そもそも僕の持論ですがね、死ぬときはきっぱりと死んだ方が良いですよ。

異世界転生とかしてまで生き永らえようとするなんて、性に合いませんよ」

我修院は思っていたことを正直に述べた。

どうせ心を読んでいるだろうとはいえ、こういうのは正直に口で言った方が良い。

天使はニタツと笑った。「ニタツ」という効果音以外に思い浮かばない。

「良いねえ。やっぱり我修院くんは私が見込んだだけのことはあるよ。」

君は普通のホモと違って、滅びの美学を心得ているんだよ。

ホモビの美学はただひたすら意地汚いけど、滅びの美学は美しいんだよ。

やっぱり君がホモでいるのは間違ってるんだよ。君はノンケになるべきだね」

我修院は背筋が寒くなった。

「ホモはいけないんですか・・・？」

「そういうわけじゃないんだ。天界はどんな形の愛だろうとOK。」

でも、物事には定めというのがあるんだ。誰がホモであるべきかってね。」

君にはホモの資格がないんだよ。君がいくらそれを嫌がってもね。」

「そんな……!」

「君がどうして死んだのか教えてあげよ。」

君は刺し殺されたんだ。確か、ミヨコだったけど？君の幼馴染の女の子だよ。」

我修院は信じられなかった。彼女は彼がホモであるということを知っていて、

さらにはそれを受け入れていた女性だったのだ。

「君は知らなかっただろうけど、彼女は君を好きだったんだ。」

外面だけじゃなく、内面も素晴らしいからね、君は。」

でも、君はホモだった。それで彼女は君を殺したんだ。」

我修院はショックで口が聞けなかったので、心で天使にあることを伝えた。

「……安心してね。彼女はもうとつくに天国に送ってるから。」

彼女のおかげで最悪の結末は避けられたからね。」

君は三日後にクラス中の女子から刺し殺されていたかもしれないからね。」

「……ありがとうございます。」

「やっぱり君は良いノンケになりそうだね。」

それじゃあ、早速転生先を教えてあげよ。」

君が転生するのは魔法少女まどか☆マギカ。」

我修院はそのアニメについては知っていた。

ホモとレズはある意味では同志だったからだ。

「君の任務はただ一つ。暁美ほむらとゴールインすること。もちろん男女の関係でね」

「さらっと難題をふっかけましたね」

彼女はまさにレズ・オブ・レズだ。ノンケには太刀打ちできない。

「ちなみに、付き合えたら原作救済するから安心して」

「・・・そこなんです、彼女が時間遡行をしたらどうなるんですか？」

「君もついでに巻き込まれるから大丈夫だよ」

あと世界改変とか起こっても記憶は維持されるから安心して」

これはひどい、と我修院は思った。

それが我修院の天界における最後の記憶だった。

「さて、胃薬の時間」

彼女は我修院を送り込むと、瓶を懐から取り出した。

先程とは違い、天使の顔はすっかり青くなっていた。

「ようやく介入の口実ができたよ」。

今までの転生者どもは女性になって原作キャラと付き合おうとしたけれど、



もうこりこりだよ。おかげでほむらが何度も時間遡行をするし。しかも、私が監督していた我修院くんはノンケであるべきなのに、なぜかホモになっちやつてたし。でも、ようやく二つとも片付けれるよ」  
彼女は胃薬を十錠くらい口に頬張った。

## 最初の死

転生した我修院はさつそく見滝原中学校に転校した。

女子たちはほむらを除き全員が歓喜の叫び声を上げた。

男子たちの一部も頬を赤らめた。可愛いからだ。

だが、我修院は前世と同じようにカミングアウトをしなかった。

そもそも下手にカミングアウトをすればほむらとゴールインできないのだ。

ホモとレズは共存関係にあると同時に、対立関係にあるのだ。

我修院はほむらの方を見る。彼女はそれに気づいて微笑んだ。

それはあの天使が見せた笑顔よりも、背筋をぞつとさせるものだった。

あなた、転生者でしょ？

笑顔とは本来攻撃性を意味するものだ。

我修院も周りに気づつかれないように、ほむらだけに笑顔を向ける。

ああ、そうさ。

ホモはポーカーフェイスが得意だ。

とりあえず、時間をすつ飛ばして放課後。

ホモはせっかちなのだ。作者はホモじゃないゾ（矛盾）。淫夢廚だゾ（悪化）。

我修院はすぐにもほむらと話すつもりだったが、

クラスの子にカフェに連れ込まれてしまった。

収穫がないわけでもなかった。さやかにアドバイスをすることができた。

これで、さやかな魔女化の確率は少しでも減らせるはずだ。

それに、幼馴染との関係で悲劇を体験させたくなかった。

自分がまさにそれで死んでしまったからだ。

そして、ほむほむがまどかのことが好きな理由の一部を知ることができた。

普通に可愛い。いや、とにかくかわいい（語彙力死亡）。

だが、我修院にはホモビのホモとは比べ物にならないくらいの鋼鉄の心があった。

ホモビのホモは老子や荘子のように無為自然に振舞う。

こいつらには仁義とかないのだ。

それに対して我修院は孔子のように徳をもって振舞う。

だから、前世でも女子からモテたのだ。

とにかく、我修院は可愛い女性とカフェにいたからといって、揺れ動かないのだ。

ホモの資格がないと言われようと、彼はホモなのだ。それ以上でもそれ以下でもな

い。

すっかり暗くなっていた。なんか例の淫獣が見えたが、気にしないことにした。

野獣先輩は女の子だ。つまり、ホモには少女の心がある。だから、見える。

しばらく歩いていると、案の定、ほむらが現れた。

「井宮我修院ね。話があるんだけど？」

「ちようど良かった。僕も話があるんだ。

先に言っておくけど、僕は転生者です。信じてくれますか？」

ほむらは朝のときよりはまだ怖くない笑顔を見せた。

「話が早くて助かるわ。土壇場になって転生者だと言われるのが一番面倒だから」

「その口ぶりや表情からして、以前から転生者がいたようだね」

「そうね。どの時間軸にも転生者が現れたのよ。

少なくとも、あなたはずっとマシね。怪しい動きをしないし、

笑顔とかは気持ち悪くないし、ホントにマシよ」

「ええ・・・(困惑)」

我修院は以前の転生者のマナーの悪さに唾然とした。

郷に入っては郷に従え、は不正確だとしても、マナーは守るべきだ。

ホモにできることが、ノンケにできないのが不思議だった。

「それで、あなたは何が望みなのか？」

「かくかくしかじか」

「・・・その八文字で理解できる私が怖いわ。」

あなたと付き合えば状況をなんとかしてくれるって?」

「キュウベえよりかは信用できるよ。最初から不信任を醸し出してきてるから。」

でも、僕はホモで、君はレズだ。多分、受け入れてはくれないだろうね」

「いいわ」

「即答!」

我修院はほむらが何を考えているのかわからなかった。

「すべてはまどかのためよ。あなたと付き合うのも我慢できるわ。」

それに、顔は悪くないからね。何というか、自然だし」

「前世からこの顔ですが?」

とにかく、話はなんとかまとまった。

「でも、一つ疑問があるわ。ゴールインの定義がわからないのよ」

「確かに。結婚とかだと、元のお話が先に終わっちゃうし」

「・・・今考えても埒が明かないわね。また明日にしましょ」

「そうですね」

「言っておくけど、まどかには手を出さないでね。」

まどかの方から告白しても、断ってちょうだい」  
「もちろん。僕はホモですからね」

さて、翌日。下駄箱に・・・下駄箱あつたけ？

ちよつと確認・・・よし、なかった。

机の中に、ラブレターが入っていた。

仕方がないので、放課後に屋上に向かうと、まどかがいた。

「悪いけど、僕はホモなんだ」

そう言つて、断つた。すると、背中に痛みが走つた。

この痛みは以前にも体験したことはある。

というより、これは射抜かれたと言つた方が正確だ。

「ホモなんて、死んじゃえ♡」

なぜかまどかが魔法少女になっていた。

レズはホモと同質だ。つまり、レズでも急展開は特有だ。

さんねん!!我修院の冒険はここで終わってしまった!

・  
・  
・

「あつ、ゴールインの定義はこっちで臨機応変に決めるからね〜」

「ちよつと待つて。また戻らなくちやいけないの!？」

「ほむほむがすぐに時間遡行を使ったからね〜。健闘を祈るよ〜」

天使はホモをまどマギにぶち込むと、胃薬を二十錠くらい頬張った。

「ホモは反省しないから困るね〜」

## 初デートはVRゲームで

目が覚めたら、ほむらがベッドの横に立っていた。

起き上がったら、アームロックをかけられた。

「あなたに反省という言葉ないのかしら・・・！」

「いや、まさか、あのまどかさんがこんなことをするとは思わなくて。

というか、あの人はレズのはずなのに、どうして・・・」

我修院はほむらに銃口を向けられた。

「私を除けば、皆ノンケよ。次言ったら脳天ぶち抜くわ」

「すみません許してくださいなんでもしますんで」

すつかり二次創作で誤解してしまっていた。

確かに、さやかはノンケだ。男性に恋しているから。

男性に恋しているからといってホモとは限らないのだ。

女性に恋しているからといってレズとは限らないように。

「次からはホモという言い訳はナシよ。あの後大変だったのよ」

「何があったんですか」



「どう説明するべきかわからないわね。まどかが魔女の力を引き出したの」  
「それで学校中が首絞め祭りに陥ったと？」

ホモは変なたとえを使う。

ちなみに、レズにも通じるので安心だ。

「違うわ。なんとというか、魔女が戦うときの力を使っていたの」

「つまり、さやかさんが人魚の魔女の剣で戦うのと同じことをしてたと？」

「そういう感じね。それで学校中が血に染まったの」

「oh・・・」

その頃、天使はさらに十錠くらい胃薬を頬張っていた。

「どうしてドツペル引き出させるのかな」

それはともかく、我修院はあることに気がついた。

「ところで、どうして僕の部屋にいるんですか？」

「尾行したからよ」

「ヒエ・・・」

とにかく、今度の対策を立てる必要があった。

「それで、どうするつもりなの？」

「そうだなあ。ほむらさんと付き合っているとえば・・・」

「私を巻き込まないでくれる？ 死にたくないわよ」

「独身主義だと言えば・・・」

「ホモだと疑われたらおしまいよ」

「むう」

「むう、じゃないわよ。簡単な話よ。EDだと言えばいいのよ」

「君は何度も周回しているから大人になっていてるだろうけど、

そうじゃない子たちはEDだと言われても理解できないと思うよ」

「あら詳しいのね」

「生前は高校生だったからね」

そのとき、我修院、ひらめく・・・！

「そうだ。それとなく僕がほむらさんと親しくしていれば、

皆が何かを察して僕に告白しなくなるはずだよ！」

「皆が何かを察したから、あなたはクラス中の女子に刺される一歩手前だったはずだけ

ど？」

でも、現状ではその方法しかあなたが生きる方法はないのよね・・・」

「さうらつと怖い事言ったね」

とりあえず、最後の案で切り抜けることにした。

それはそうと、恋人同士がすることがある。

おっと、読者の一部に今の言葉に変な反応をしたものがあるようだ。

そういった輩は窓際行つて、どうぞ。

これは純潔（当社比）な小説なんだ。

デートだ。ゴールインするためには、最初にデートをする必要がある。

「問題が一つあるわ。男性の手を握れないのよ」

「それは大変ですね」

「だから現実じゃなくて、仮想世界で練習する必要があるわ」

うーん、無理のない展開。やっぱり作者はホモではない。

「なるほど。でも、そういった機械はあるんですか？」

「ウチにあるわよ。私の分と、本来はまどかの分が」

「わかりました。それじゃあ、良いゲーム探しておきますね」

「ありがとう」

そこが彼がホモなのにモテた理由でもあった。気が利くのだ。

こうして数時間後、ゲームが見つかったのでほむらの家でVRデートをすることになった。

「これ実質的には家デートでは？」

「気にしてはだめよ」

ゲームの名前は「三体オンライン」。

どうやらこの世界のETOは普通のゲーム会社のようだった。

読者の皆様は突然何が始まったのか理解できないだろう。

しかし、これがホモ特有の超展開なのだ。そろそろ受け入れたまえ。

ゲームの中に入ると、二人は夜明けの荒野にいた。

荒野はダークブラウン色で、細かいところが見えづらい。

彼方の地平線には白い光が細長く伸び、頭上の空は瞬く星におおわれている。

「それはそうと、第一巻を買ったらお小遣いが消えたそうですよ」

「いきなり何の話？」

「なんか電波を受信したんです……」

「そういうえば、何か聞こえるわね。三体Ⅲのネタバレをしたい……?」

ホモは電波を受信できるのだ。レズは言うまでもない。

ネタバレすると、地球文明と三体文明は滅亡して、羅輯は死ぬ。

そのとき、大きな爆発音が轟き、遠くで赤く輝くふたつの山が地面に崩れ落ち、

平原全体が赤い光に包まれた。

もうもうと舞い上がった塵や埃がようやく消えたあと、

空と大地の間に二つの巨大な文字が直立しているのが見えた。

三体

「・・・あなただってやっぱりセンスいいわね。

まだ何も始まってないのに、良作だつてわかるわ」

「まだわかりませんよ。なんとなく選んだだけですから」

三体オンラインは他のゲームと違い、課金要素はない。

VRでブロックがないマイクラだと思えばいい。

このゲームはプレイヤーたちが恒紀と乱紀をなんとか予想して、

文明をAIのキャラクターとともに発展させるゲームだ。

決して、ボスが強すぎて三十連ガチャでまさか全世界一位になるようなゲームではな

い。

ホモはゲームにうるさいのだ。

「こういったゲームでまさか殺し合いが起きるとは思えませんし」

「あなたの世界にはそういったことがあったの？」

「小説の中だけですがね。まさかVスーツで再現できるわけありませんから」

ともかく、二人は存分にVRゲーム内で初デートを楽しんだ。

「あれ、いつの間にか手をつないでるじゃないですか」

「あら、本当ね」

ゴールインにまた一歩近づいた。

# マミさんホモった、略してマミホモ

実際に魔女を目にすると、特に恐怖は感じなかった。

なぜなら、彼はホモだからだ。

確かにホモはボーガーには負ける。しかし、ワルプルギスの夜には勝てる。

ニコニコ動画のコメントにもそうあったからだ。

「いや、下がってなさいよ」

「まさかデート中に来るとは」

だが、ホモにはある秘策が会った。

「昨日部屋に帰ったら置いてあったんですよ。あの天使からでしょう。」

「このデバイス？なんか男性でも魔法が使えるとか手紙に書いてありました」

「捨てなさい。今すぐ！」

我修院は言う通りにした。秘策は無に帰した。

「捨てましたが・・・マズいものだったんですか」

「そのデバイスとやらで何度も酷いことになったからよ。」

そもそも別のアニメのモノを持ち込まないでほしいわ

リンカーコアって何よ。キュウベえも頭を抱えていたわよ」

「秘策が無に帰したので、下がって様子を見ることにした。」

「そのころ天使は別の天使にアームロックをかけていた。」

「これ以上私の胃に穴を開けるつもりかな」

「ぐわああああ！」

ホモは男なので、女性ばかり戦わせているのが少し恥ずかしい。

女性の心を持つてるとはいえ、漢でもあるのだ。

さて、ほむら自身は魔法少女としての戦闘力は低い。

しかし、あちこちから拝借した兵器を使うことで補っているのだ。

武装錬金とは違い、通常兵器が通用するのだ。

「やっぱりすごいなあ・・・」

「あら？もしかして井宮我修院くんよね？」

声をかけられたので振り向くと、巴マミだった。

しかし、まだ面識がないはずだった。

ちなみに、転校とかは済ましているのでもどかやさやかとは面識がある。

「はい、そうですよ。マミさんも魔法少女やっていたんですね」

「・・・どうして魔法少女のことを知ってるの？」



我修院は戦っているほむらを指差す。

「遊んでいる途中で遭遇してしまって……」

僕はこのように安全地帯に退避させてもらっています」

「そう……。まさか恋人がいたなんてね」

そうこうしているうちに、ほむらは魔女を討伐したようだ。

「ねえ、ほむらさん。この子貸してくれない？」

「何を言ってるのかわかってる？」

「大丈夫！先つちよだけ！先つちよだけだから!!」

素晴らしいながらマミは魔法少女に変身した。

「話し合いましょ！曉美さん！」

「それは銃を向けながら言うことではないわ」

そこで、ホモはある秘策を思いついた。

ホモはホモ。これこそが最大の秘策だ。

「安心してくださいマミさん。僕はホモです。」

だから、ほむらさんともある意味では偽装関係なので、

まあ、なんというか、諦めてください」

マミは銃を下げて、しばらく考えた。

「・・・それもいいかもしれないわね」

彼女は恍惚の表情を浮かべた。

「フヒ・・・ホモか。いいわね。ねーホモ、ねーホモ・・・」

こうして立ち去っていったのだった。

「時間遡行を使う必要はなかったですね」

「軽々しく言わないでほしいわ。こっちは命の危険を感じたのよ」

そのころ、さやかは上条恭介の病室にいた。

そこに、マミが現れた。

「さて、二人にはホモになってもらうわ」

「さやか、この人知り合い？」

「正確に言えば、知り合いだった人かな。たった今知り合いじゃなくなったよ」

「尻合い・・・いいわね！」

さやかは逃げ出そうと思った。しかし、恭介を置いては逃げられなかった。

これが彼女の乙女心を殺す結果になってしまった。

「じゃあ、ホモになろうか（暗黒微笑）」

二人がどうやってホモにされたのか。それはセリフだけで察してもらいたい。

あまりにも詳しく書くと、この小説がR—18Gにされかねないからだ。

この件に関しては、あまり深く調べない方を推奨する。

「ンンツ： マ。ツ！ア。ツ！→」

こうしてさやかと恭介はホモになった。

さやかは女だからホモにはなれないって？じゃあ野獸先輩はどうなるんだ？  
とにかく、二人はえげつない手段でホモにされてしまったのだ。

二人はホモになった。だから、ホモである恭介はホモのさやかと付き合った。  
一方その頃、我修院とほむらはなんか穴場の和食店で食事をしていた。

「・・・一粒残らず食べるのね」

「そりやそうですよ。食事は粗末にできませんから」

聞いたか？一部のホモは我修院を見習うように。

「最初は和食店と聞いて、少しセンスを疑ったけど、良い場所じゃない。

ご飯も上手く炊いたらここまでおいしくなるなんて知らなかったわ」

「白米を見くびってはいけませんよ。北大路魯山人もそう言っていましたから」

北大路魯山人は食事にうるさい。ホモもいなりごときでうるさくなる。

つまり、北大路魯山人はホモである。ホモであるということは野獸先輩である。

野獣先輩は北大路魯山人だったのだ。たまげたなあ。

Q. E. D

「それにしても、あなたと杏子と考えが合いそうね」

「そうですかねえ」

おやすみ、どうせまた会えるので

ある日、枕元にキュウベえがいた。

「やはりボクたちが見えるようだね、井宮我修院」

「さようなら」

キュウベえの首根っこを掴んで、窓から放り捨てた。

だが、その淫獣はいつの間にか枕元に戻っていた。

「・・・テレポートなんてできたんですか？」

「それは、君たちの勝手な思い込みにすぎない。

ボクたちからすると、創造主も低レベルの文明だ。

テレポートなんてボクたちからすると序の口だよ」

厄介なことが始まっていることに我修院は気がついた。

キュウベえはどういうわけか転生者だけでなくアニメ制作陣も把握しているらしい。

「この前、転生者とか名乗る男がボクたちの母屋に攻撃してきたからね。

でも、低レベル文明の出身者だから、あっけなく処理できたよ。

忠告しておくよ。君たちがどんな能力を持っていようと無意味なことだ。

ボクたちの技術力を見くびらないでほしいな」

水滴みたいな見た目をした何かが部屋の真ん中に現れた。

聖母の泪、その物体はまさにその一言で説明ができるくらい美しいものだった。

「なんか出てくる作品を間違えた兵器を持ってますね・・・」

「君に要求することはただ一つ。戦うな」

淫獣にしては語気がやけに強かった。

「君は本当にわけのわからない存在だ。他の転生者はまだ理解できた。

しかし、君はなんだ？生殖には役立たない嗜好を崇拜している。

事実、ワルプルギスの夜はこの街に少しでも近づこうとはしない。

そんな君が魔法少女や魔女と戦ったら、どんな反応が起こるかわかったもんじやない。  
い。

最悪の場合、ボクたちにも被害が及ぶかもしれないんだ」

水滴が我修院の方を向く。

「もし君が手を上げたら、この水滴が君に体当たりすると思ってくれ」

「ヒエ・・・」

次の日、キュウベえに言われたことをほむらに正直に話した。

「かくかくしかじか」

「だからそれやめなさい。確かに円滑に済むけど。」

「……あなたがホモだからって、そんなことあり得るのかしら」  
「それがあり得るのよね」

「マミさんが急に現れた。犬の散歩の途中だと思われたが、よく見ると杏子が首輪につながれていただけだった。」

「マミ……あなた、どういうつもり？」

「あら、杏子さんをホモ調教しているだけよ」

「ふ、ふざけんな！とつとと離せよ！」

「また食べさせるわよ」

「くうーん……」

「完全ではないにしろ、杏子を屈服させていた。」

「我修院くん。ほむらさんをホモにすれば偽装する必要もないわ」

「断ります。ほむらさんはほむらさんのままでいいんです」

「うん？今なんでもするって……」

「耳悪くなりましたか、マミさん？早く杏子さんを離してください」

「なんとこいつホモなのに語録を無視しやがった。」

「その報いだろうか？マミは杏子を撃ち殺した。」

「あなたが拒否したから、皆ノンケになるしかないじゃない！」

もはやママにとつて「ノンケになる」と「死ぬ」は同義語となっていた。

ママはほむらを射殺しようとした。しかし、とっさに我修院が走り出し、

ママを押し倒すと、髪飾りからソウルジェムを奪い取って、握りつぶした。

「……やってしまいましたね。ほむらさん、伏せてください！」

「でも……」

「伏せてください！」

ほむらは彼の言う通りに伏せた。

その直後に残酷に咲き誇った赤い薔薇はどれほど美しかったことか？

彼は最後の最後にこう言った。

「おやすみ、どうせまた会えるので」



資格なきホモはなぜダメなのか？

「ここに来るのも三回目ですね」

「そうだね」

「ここが天国ね」

我修院と天使は目玉が飛び出んばかりに驚愕した。

「ほ、ほも、じゃなかった。ほむらさんどうしてここに!？」

「すぐに自殺したからよ。少しお説教が必要みたいね。」

天使さん。少し席を離れてもらえるかしら？」

「さ、サーイエツサー!!!」

天使は口調すらかなぐり捨てて逃げてしまった。

「さて、準備はいいわね？」

「すみませんゆるしてくださいなんでもしますから」

「問答無用。脳みそ食いしばりなさい」

我修院は天国でも死ぬことを学習した。

「痛いよお・・・ねーホモ、ねーホモ・・・」

「もう傷は治ったでしょ」

「それでも痛いものは痛いんですよ」

「銃痛いのはわかってるわよ」

ほむらは我修院を抱きしめた。

「あれ、レズのはずでは……」

「こういう時くらいは静かにしなさい」

ほむらはそのまま我修院を抱きしめ続けた。

「……あなたがいないと、まどかを救うことができないのよ。」

今のところ方法がこれしかないんだから。だから、死なないで」

「おう、考えてやるよ」

我修院はまた死んだ。

「わかりました！だから撃ち殺してすぐにアームロックするのやめてください！」

「こうでもしないと、あなた懲りないでしょ！」

あと、そろそろ戻ってきてちょうだい。天使さん」

「ひゃ、ひゃい〜」

「なるほど、不信任がありすぎて逆に信用できるわね。」

我修院、少し席を外してもらえるかしら？」

「は、はい！」

こうしてほむらと天使の二人きりとなった。

「さて、色々と問い詰めたことがあるわ。今までの転生者を送り込んだのは……」

「……私ですわ〜」

「理由は聞かせてもらえるかしら？」

「……一種の惰性ですよ〜。最初は二次大戦でグランダルメ大の罪が相対的に軽くなつたから、

代わりに別の世界に転生させたのが始まりですわ〜。そこからはもう適当になつたんですよ〜」

「それであんな馬鹿たちが？」

「……その件に関しては、何も弁解はできませんね」

キュウベえよりかは信用できるのはこの点だろう。

彼女は素直に自分の非を認めてくれるからだ。

しかも、口調が変わっている。シリアスになつたのだろう。

決して、尻ASSではない。

「次の質問よ。井宮我修院は何者なの？」

「ホモですね。より正確に言えば、資格のないホモです」

「・・・答えになっていないわ」

「そう言うだろうと思つて、ある物を用意しています」

天使は懐からいかにもSFチックなレーザー銃を取り出した。

「この銃は資格がある者がレバーを引けばレーザーは発射できませんが、資格のない者がレバーを引けば必ず核爆発が起きます」

「ちよつと何を言つてるかわからないわ」

「彼に關しても同じことが言えるんです。彼は本来はノンケであるべきだったんです。

しかし、彼は資格がないにもかかわらずホモになつてしまつたんです。

そうなると、何が起ころかわかつたものではないんです」

ほむらはキュウベえがどうして我修院を危険視した理由の一片を理解できた。

彼は資格がない者にレバーを引かれたレーザー銃のようなものだ。

「彼が死んだ理由はかくかくしかじかでご存知ですよね」

「この空気でその八文字使うの？まあ、知つているけど・・・」

「おそらく、アレは彼がホモだったことにより引き起こされたモノです」

「・・・ちよつと待つて、それつてつまり」

「ええ、彼を放つておけば、黙つていようと彼は殺されるんです。

あなたのクラスメイトが一齐に彼をナイフでめつた刺しにするのは避けられません」

「最悪ね。でも、あの世に隔離すれば問題は……」

「あなたの世界の問題もついでに片付けたかったからですよ。」

異世界に亡者を送り込むのは自由なのに、介入する自由はないんですから。」

でも、我修院くんに関しては私が担当していた人間なので問題はないんです。」

「ついでなのね。じゃあ、死にましょ（暗黒微笑）」

「HMRくん！ウワアア！！HMRくんウワツ……HMRくん……（迫真）」

天使も死ぬようだ。たまげたなあ。

「そもそも一つ問題があるわ。私はレズよ。」

だから杏子とくつつけさせた方が良かったんじゃないの？」

「いたたたた……。確かにあの子はノンケだよ。」

でも、ノンケの子には我修院くんのホモを中和できないからね。」

そこでレズのほむらさんの出番というわけだよ。」

君もまた普通のレズとは違うからね。」

私達はアカシ明石市ックレの歴史コードで観測してるからわかるんだけどね。」

「そのルビやめなさい」

「とにかく、なんやかんやで君は別の男性と結婚していることもあるからね。」

「どこを観測したのよ」

「気にしなくていいよ。いや、知らない方がいいね。」

「バママが色々とか酷いことになっているからね。」

「そう、だったらやめておくわ。つまり私はノンケなのね？」

「いや、レズでもあるんだ。まあ、我修院くんよりかはマシなレベルだね。」

「そうなのね……」

そして、最後にもう一つ質問をした。

「あなたは私のいる世界がどれほど過酷か知っているのよね？」

「どうして彼に何の能力も持たせなかったの？」

「そりゃ、核ミサイルに時限爆弾を取り付けるもんですよ。」

「わかったわ（震え）。我修院、戻ってきなさい。」

「あつ、ほむらさん。親切な神様に王の財宝とかいいうのをもらったんですが……」

「死になさい！今、すぐ！」

「HMRくん！ウワアア！！HMRくんウワツッ！…HMRくん？…（迫真）」

こうして、なんやかんやで二人はまだマギに戻っていった。

「……ほむらさん。君は完全なレズじゃないから良かったんだよ。」

もし、我修院くんが神浜市の子たちに会ったら……考えたくもないね。」

## ホモは実感がまだ湧かない

魔法少女おりこ☆マギカ。すっかりこいつの存在を天使は忘れていた。確かに神レスタウン浜市はホモと接触すればマズいことになる。

しかし、グロさを基準とすれば、こっちの方がヤバイ。

ホモビは精神的にグロい。つまり、ホモはグロい。

世界がホモビに染まると、誰にも倒せない魔女が生まれるのと、

どちらが織莉子にとって恐ろしいのか、いや、どちらも恐ろしい（反語）。  
「なんか背筋が寒くなっただんですが」

「さつき三太陽の日を経験したのにな？」

二人はいつものようにVRデートをしていた。

三体オンラインはとにかくものすごいゲームなのだ。

どんなのかわからないって？ 原作読め。

「それにしても、危うく火あぶりにされるところでしたね」

「まさか三体問題を提案しただけであんなことになるとは思わなかったわ」

この二人は学生だが、我修院はもともと成績は優秀で、





彼女の前に、今までのホモよりもずっと汚いナニかが立っていた。

あまりの汚さに、織莉子は身動きができなかった。

「・・・あなた、ただのホモじゃないわね」

「もうこれわかんねえな」

「質問に答えなさい」

「俺は一種の概念体だ。こことは別の世界のホモの象徴だ。」

あまりにも晒されすぎた俺は実体を保てなくなり、概念体になってしまった」

「・・・少なくとも、私が視たホモはあなたではなさそうね」

「・・・ホモが綺麗とかわかんねえな」

そう言い残して、彼は消えてしまった。

「綺麗・・・そういうことね」

今のホモは織莉子にヒントを与えたのだ。

彼女が殺すべきは綺麗なホモ。

しかし、ホモとは普通汚いものだ。綺麗なホモなど簡単に見つかるのだろうか？

いや、見つかるはずだ。必ずボ口を出すに違いない。

「はつくしよん」

「風邪でもひいたの？」

同じ頃、呉キリカが魔法少女狩りをしていたが、こちらは無視しよう。

ホモと魔法少女の運命が交差することなど普通はないのだから。

「・・・思えば、本当に不思議ですね」

「急にどうしたのよ」

「だって、前世だとほむらさんは画面の中の存在だったのに、

今では僕の隣にいるんですから。本当に人生って不思議だなって」

「その感覚があるから、他の転生者よりマシなんですよね」

「そうですかね・・・というより、マシって」

「他の転生者たちはまどかたちをフィギュアを見るような目でみていたわ。

そして、自分がまどかたちに近づけるのを当然だとも思っていたのよ」

彼はほむらの言いたいことを理解することができた。

とある書き手がリリなので提唱した現象はまどマギにも適用されたのだ。

「・・・僕もでしょうね」

「素直に認めてくれるのね」

「まだ実感が湧いてくれないんです。自分がちっぽけな人間だっていう」

「でも、あなたは成長しているわ。なんとなくわかるの」

ほむらは天使が彼に能力を与えなかったもう一つの理由をわかった気がした。

彼は何の力もなかったからこそ、この世界でゆっくりと育つ必要があった。

対して他の転生者は育つ必要がないので、品性は育まれないどころか劣化する一方だった。

「・・・もう少し、隣にいてくれますか」

「別にいいわよ」

## 二百年前のホモから

未来というものは実はというところまちまと変わるものだ。

そうでなければ、ドラえもんという作品は成り立たない。

だから、織莉子は暗い未来がもつと変な方向にいくなど想像もしなかった。

「ほむらさん、キュウベえから聞きましたか？」

「ええ、あなたの想像通りよ。すんなりと母星の座標を教えてくださいわ」

「そうでしょうね。彼らは僕たちを何とも思っていないんですから。」

僕たちが虫たちに対して殺虫スプレーを隠さないのと同じ感覚でしょう」

やっぱりホモは変なたとえを使う。

そして、そのホモの行動で織莉子は新しい未来を視ることになった。

「・・・何よ、これ」

前の未来視と違い、今度はホモの顔がはつきりと見えた。

ノンケかと思まがうくらいに綺麗なホモの顔。

「はつくしよん」

そのホモはどうやらキュウベえに何かを話しかけている。

だが、話は決裂したようだ。そして、携帯のボタンを押した。そのときのキュウベえに浮かんだ表情は恐怖だった。

恐怖、それは感情を持ちえないはずの彼らにはあり得ないはずのものだった。キュウベえも何かを反撃したようで、ホモと魔法少女たちも動揺した。

だが、それでも彼らの勝利は揺るがなかったようだ。

その後、黒髪の魔法少女とホモが幸せそうなキスをしたところで場面は転換した。

新たな未来ではホモに世界が改変されることも、誰にも倒せない魔女が生まれることも無かった。

織莉子も幸せな日常を送っていた。ついでに、なぜか宇宙開発が加速していた。

それから二百年が経過したようだ。結論を言えば、太陽系は滅亡した。

始まりは一枚の紙切れだった。その紙切れはどうやら太陽系外からやってきたようだ。

それが一瞬の光を放って消えた。それが始まりだった。

太陽系の惑星たちが次々と物理的に二次元化していった。

それが未来視の終わりだった。世界は終了したのだ。

「……こんなの、絶対に認められない」

結局、織莉子にとっては早いか遅いかの問題でしかなかった。

あのホモはキュウベえが恐怖するような何かをしてくした。

キュウベえもその報復で同じことをしてくした。

おそらく、キュウベえの本拠地も同じことになったのだろう。

「ところで、キュウベえの母星の場所なんて知ってどうするのよ」

「逆に聞くけど、他人の住所を公開したらどうなると思いますか？」

「・・・あなたって本当に悪魔ね」

「ホモと呼んでください」

「それは駄目よ。私はあなたをノンケにしなくちゃいけないんだから」

「えっ？」

その時、窓を割って呉キリカが入ってきた。

「・・・恨みはないけど、死んでもらうね」

我修院は察した。自分の家に入り込んできた侵入者はほむらが狙いだ。

なので、ほむらから少し距離を取った。

「あつ、誰かは知りませんが、どうぞお好きにしてください。あと窓の弁償も」

「あなたって本当にひどいわね！」

「どうせほむらさんは時間停止使うから逃げれるでしょ。」

僕はただのホモですよ？それにキュウベえと対話しなくてはいけないので」

ホモという単語に呉キリカは反応した。

「へえ、君ホモだったんだ？」

「はい。よくノンケと間違えられますが」

「なるほど。私のモノにしたくなるくらい綺麗だね。」

でも、織莉子の未来に映ったのが君なら殺すしかないね」

我修院は何の能力も無い。このままではなぶり殺しにされる。

だからといって、<sup>タダ</sup>無料で死ぬわけにはいかない。

「ほむらさん、何度でもマフラーなんて巻いてあげますよ」

「待って！巻かれた覚えはない！それに絶対嫌な予感するんだけど！」

顔を殴るのはちよつとあれなので、腹を殴った。

すると、呉キリカはどこかに吹っ飛んでいった。

これが資格なきホモが引き出す力なのだとほむらは理解した。

「確かに時限爆弾なんて必要ないわね・・・」

数分後、呉キリカは遠いアジアのこの街にいた。

「我不許你的不法入国」

「私は被害者なんだが？」

おっと、読者のなかには中国語がわからない人もいるだろう。

しようがないなあ読者くんは。ルビでも振つといてやるか。

「ホモに吹っ飛ばされたんだよ！信じてくれないか！」

そんなの関係ねえ、はいオッパビ  
「無関係、灰尾牌泌」

「絶対私のこと馬鹿にしただろ!？」

キリカはこの状況を打破するために頭を動かした。

ここは間違いなく中国だろう。台湾かもしれないだつて？

でも、作者は中国が好きなので、キリカがいるのは中国だ。

中国は警官の質が低い。つまり、ハニートラップが効くかもしれない。

無理のない展開。何度も言うように作者はホモではないのだ。

呉キリカは自分の体に自信は持っていた。

「よしー！ちよつと愛し合おうか！」

R—18になりかねないので、ここから先はセリフだけだ。

そんなじゃあ、俺も脱ぐか  
「我 脱」

「よしよし！計画通り！」

コイツを見てくれ、これを見てどう思う？  
「我依頼你、你見何思？」

「すごく・・・大きいです。やばい、こんなのに勝てると思えない」

セリフだけでも危ないので、カット。



「負けた……。もう織莉子とかどうでもいいよお……。そういえば、お巡りさんの名前は何？」

「史強<sup>シイチャン</sup>だ。作戦司令室に所属している」

「最初から日本語喋ろうか???というか、出てくる作品違うだろ???罰として二回戦だ」

「上等だ」

そういうわけで、しばらく魔法少女狩りは止むこととなった。

「結局、私は牢屋に入ることになるのか」

「不法入国と公務執行妨害だからな」

## 二百年後の君へ

太陽振幅反射、なんか三体にそういうのがあった。

まあ、ともかく、この世界ではアプリで別の星系にメッセージを送れる。もちろん、返事が来る保証はない。

むしろ、よくよく考えてみたら危険だが、その時は誰も気づかなかった。だって、黒暗森林理論とかないもん。

「ホモだからゆまの面倒とか任せられるんだよな」

「近所の子供たちの世話はしたことがあるので」

そういうわけで、ゆまが魔法少女となることはなかった。

キュウベえは本能的にホモに近づかなかったのだ。

「……怒らないから正直に答えなさい。絶対、男の子の方だったんでしょ？」  
「さて何のことでしょうか？」

海賊はどこまで行っても海賊だ。

ホモもどこまで行ってもホモでしかないのである。

「……まあいいわ」

それからしばらくして、ご存知のように見滝原中学校は結界に覆われた。

関係ない話だが、リリなの小学校の名前よりも入力が簡単だ。

「なんてこった！早乙女先生が殺されてしまいました！」

「この人でなし！」

ホモ君のせいで、織莉子さんの計画は色々と崩れてしまったが、

それでもどうにかこうにかして学校を結界に覆うことができた。

RTAだったら、これって・・・勲章ですよ？

トロフィーももらえるに違いない。

「でも、どういうわけか携帯の電波は通じます！」

「本当に運がいいわね！キュウベえ、来てくれる！」

「急に呼んでどうしたんだい？なんか尻がキュツとするから嫌なんだけど」

「このボタンを押せば、全宇宙にキュウベえさんの母星の座標が発信されます。

それが嫌だったら、地球では営業しないことを約束してください！」

「ぼぼぼぼボクがそんな脅しに屈するわけがなかなないじゃないか」

「ここまで動揺するとは思わなかったわ。もちろんまどかにも手出しはしないわよね

？」

三体人でさえも宇宙が黒暗森林だと知っていたのだ。

どうしてキュウベえたちが知らないと言えるのか、いや、言えない（反語）。

「・・・よし、要求を呑もう」

「やりましたね！家族が増えますよ、ゆまさん！」

「何を言ってるのかしら？」

未来とはちまちま変化するものだ。

本来だったらキュウベえが要求を吞まずに、ボタンを押すところだった。

ゆまが魔法少女にならなかつたバタフライ・エフエクトによるものだった。

「それじゃあ、とつとと永久機関でも開発して母屋にでも引きこもってください」

「ボクたちが何をしたっていうんだ・・・」

織莉子はその光景を見て動揺していた。

自分の見た未来は全て捻じ曲げられてしまった。

そう、目の前のホモによってすべてが捻じ曲げられたのだ。

「これでほむらさんの長い旅も終わつたんですね・・・」

「信じられないわ・・・。夢じゃないのね・・・」

「頬をつねつたらわかりますよ」

「痛いから夢じゃないわね」

ほむらは涙を流していた。長い旅の終着点。

「おっと、ついでの魔法少女を普通の少女に戻しといてください。もちろん、魔女も。わかっていきますよね？」

「わ、わかったよ……」

織莉子の中で何かが崩れた。

織莉子がやろうとしたことは全てホモがやってしまった。

しかも、魔法少女も魔女も人間に戻されるのだ。

そもそも、魔法少女というのは願いと引き換えになるものだ。

ある意味では少女たちの意思を無下にする行為ともいえる。

生きる意味を知りたい

魔法少女でなくなった織莉子には何が残るというのか？

魔法少女でなくなった以上、願いですら無効になるかもしれない。

もう織莉子の体は勝手に動いていた。

織莉子の放った攻撃はホモの心臓を貫いていた。

だが、その拍子にホモの指がボタンを押してしまっていた。

「うわあああああ」

キュウベえは発狂した。

それはそうと、この時間軸にも我修院以外に転生者がいた。

その転生者は織莉子を自分のヒロインだと勝手に思い込んでいた。

「なんか漫画と色々違うような気がするなあ。」

キリカもいないようだし、まどかはなんかまだ生きてるし。

「そうだ！ここは神様からもらったノートでまどかを殺そう！」

40秒後

「フア!?ウーン・・・」

それはちょうどホモが死んだのと同時であった。

「・・・」

ほむらは茫然としていた。

彼女が手に入れようとしたものは、あっという間に奪われてしまった。

彼女は時間遡行で別の時間軸に行ってしまった。

「・・・織莉子、君は大罪を犯した」

「・・・ホモが死んで何が悪いの？生産性もないのに」

「そうじゃない。君はボクたちの文明に死刑宣告を下してしまったんだ」

「別にアンタらの文明なんてどうでもいいわよ」

「そうか、君がそんな態度を取るっていうんだったら、こっちにも考えがある」

キュウベえはしばらく沈黙した。

「……終わったよ。君たちの星系を全宇宙に発信した。遅くても二百年後には地球文明は滅亡するだろうね」

「……そう」

織莉子の行動は全て裏目に出ってしまった。

結局、この世界は滅亡を迎えることになる。

「がはははは！まだ諦めるには早いぜ、お嬢さん！」

どこか中国語訛りのある日本語を喋る中年の男が現れた。

その隣には行方不明になっていた呉キリカがいた。

「二百年、だろ？時間はあるじゃねえか！」

それに、ちょうど俺たちと同じ末路を辿ろうとしている奴もいる。

協力して、逃げればいいんだよ！」

「あなた誰よ？」

「作戦司令室所属の史強だ。事情はだいたいこいつから聞いていた。

もともと、政府上層部は魔法少女とか魔女とかの存在は勘づいていたらしいがな」

「織莉子、ごめん！全て喋っちゃった！」

少し前の織莉子だったら、呉キリカとこの男を惨殺していただろう。

もともと国会議員の娘である彼女にとっては、中国は天敵だったからだ。

しかし、もうそんな敵意すら湧かなくなつた。

どちらにせよ、日本も中国も滅びるからだ。

「ちやうど政府がお前らの存在について公表した。

しばらくはデモとか色々であるが、もつと忙しいことがあるぞ！」

史強はキュウベエの頭をつかみ、持ち上げた。

「協力してくれるよな？俺たちが生き延びれば、これからも宇宙の維持はできる。

逆に共倒れだと、誰が宇宙の維持をするっていうんだ？」

「わかつたよ……」

史強は再び織莉子の方を向いた。

「さて、しばらく中国と日本だけじゃなく世界が荒れるだろうな。

友人の社会学者が言っていたんだが、しばらくは圧政が必要らしい」

「それを……私にやってほしいと？」

「そうだ。難しい仕事じゃないだろ？」

「……それもそうね」

「カウンセラーでもつけてやるよ。今言った社会学者とか」

「考えておくわ」

「さあ、これから忙しいぞ！」



こうして世界は新たな局面を迎えた。

白日のもとに晒された魔法少女の存在。

迫りくる二つの世界の滅亡。

多くの者たちがパニックに陥った。

特に精神的ダメージが大きかったのは魔法少女たちだった。

魔法少女を排斥しようとする市民からの攻撃と世界の滅亡。

もともと孤独だった魔法少女たちにとって市民たちの攻撃などなんともなかった。

だが、世界の滅亡という事実だけが重くのしかかった。

自分たちがいくら魔女を倒そうと、世界の滅亡は避けられないのだ。

いくら行動を制限しようと、市民と魔法少女たちは暴動を起こした。

いつか世界は滅びる！ 私達には墮落と退廃の口実が与えられたんだ！

何書いてるのか作者にもわからなくなってきた。全てホモの所為です。

だが、そんな自暴自棄は一人の少女の言葉によって収められた。

いつかはいまじゃないよ

これって・・・勲章ですよ（本日二度目）？

冷静さを取り戻した人類はゆっくりと逃げる準備を進めた。

そして、太陽系が二次化される数年前のことだった。

「チトセさん、そろそろ時間ですよ」

「ええ、わかりました」

人類の自暴自棄を抑えた少女の子孫は墓の前に立っていた。

それはある意味太陽系を滅亡に追いやったホモの墓だった。

ほむらの時間逆行に彼の遺体もついていった。

だから、そこに彼は眠ってなんかいなかった。

「それでは、さようなら」

その日、太陽系から人類はいなくなつた。

「よかつた。人類は助かつたんですね」

「ごめんね。おりマギのこと忘れちゃっていて」

「いいんですよ。とりあえず僕のせいで人類絶滅という事態は避けたので」

「まさかSF的展開になるとは思わなかつたよ」。

「ところで、座標発信ってどうやって思いついたの？」

「あるピアニストの動画を前世で見っていましたからね」

「あつ（察し）」

その時、二発の銃弾が天使とホモの脳天を貫いた。

「ねえ、今、どんな気持ち？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴという効果音が似合いそうだ。

「し、仕方ないですよ！まさか殺されるなんて予想できなかったんですよ！」

「そ、そうだよ〜！」

「まだ懲りないようね」

ここうして、また天使とホモは死んだ。

その後、件の転生者は地獄の責め苦を受けることとなった。

「さて、ポリンキーの三角形の秘密を解くまで転生できないよ〜」

「うわあああああ」

## ホモ的三体問題

ホモビがどの時間軸にもあるように、

どの時間軸にも三体オンラインは存在する。

そういうわけで、どの時間軸でもVRデートは可能だった。

どの時間軸でも野獣先輩を拝めるように。

「よくよく考えたら、三体問題に解なんてありませんよ」

我修院のIDはHomomothreeBody、略してHTBであった。

「それ言ったらおしまいよ」

ほむらのIDはHomuHomu、略してHHである。

二人はやり手のプレイヤーとして有名であった。

このゲームは頭を使う必要があるのに、頭を使うのがごく少数だったからだ。

計算問題に取り組もうとするのはごく一部。

HTBは前世で進化的アルゴリズムをかじっていた。

だから、次の乱紀がいつ来そうかとかぐらいは予想できた。

しかし、さすがに三体問題の解を求めることはできなかった。

それでも、HTBのいる文明は栄えることとなった。

「というより、これ別の惑星に逃げたほうが早いわね・・・」

「乱紀で宇宙艦隊全滅しそうですよ」

「ありそうで否定できないわね・・・」

ちなみに、HTBにはホモ疑惑があるが、HHの存在がそれを否定する。

ホモがあんな可愛い女の子と付き合えるわけがないからだ。

つまり、HTBはホモではない。

いつの間にか二人は手をつないでいるので、多くの者が糖尿病となった。

「HHさんの手、あったかいですね」

「VRなのにな」

さて、HTBは所属している文明のリーダーではなかった。

とある女子大学生がリーダーである。

その女子大生のIDはSevenSea。

多くの男性プレイヤーは彼女の前では（色々な意味で）赤子に等しい。

HTBは読者もご存知の理由で、珍しく彼女と対等な男性プレイヤーだ。

「あら、二人とも今日もラブラブね」

二人は顔を赤くして手を離れた。

こいつら、ホモとレズである。

「ふふっ、ところで次の乱紀はいつ来そうかわかる?」

「ゲーム内時間で十年後ですね」

現実時間と三体時間は違うのだ。

「まあ、誤差があるかもしれませんが」

「それでもいいのよ。隣の文明は数日前の乱紀で滅んじやったし」

隣の文明は Beautiful Country というプレイヤーが指導者だった。

だが、彼女は冷酷な圧政を敷いたので、乱紀がきっかけでクーデターが起きたのだ。

結局、彼女はVRゲームでも失敗してしまうのだ。

「念のため、近くの森の様子見てきますね。今どこの勢力下にあるのかわからないので」

「あら、ありがとう」

近くの森は隣の文明の支配下にあったが、今はどこの勢力下にあるかわからない。

そもそも三体オンラインでは国境線が常に変動的だ。

ゲーム内時間で三時間も経たないうちに海が蒸発するかもしれない世界だからだ。

「私もついていくわ」

「・・・ありがとうございます」

HHは最近HTBの様子がおかしいことに気がついてた。

まあ、ノンケに変わりつつあるのだろうと甘く見ていた。

「僕はこっちの方を見ていくので、HHさんはそっちをお願いします」

VRゲームと言えど、ログが残るかもしれないので実名は出さないのがマナーだ。数分歩いていると、甲高い声が聞こえてきた。

「・・・の効果は・・・なのね」

「ふゆう・・・」

「大変だね・・・」

よく聞き取れなかったので、近づこうとしたら、音を立ててしまった。

「誰!?出てきなさい!」

言う通りにしたら、三人の素っ裸のプレイヤーが立っていた。

「あつ、僕はホモなので安心してください。それじゃあ」

「安心できるかー!」

「もうお嫁にいけないよ!」

「ちよつと歯を食いしばってくれ」

HTBの顔はあつというまに膨らんだ。

「・・・その様子だと、皆さんは食事効果を検証していたようですね」

「そうよ?何か文句ある?」

食事効果というのは文字通り食事をとった時の効果だ。

ゲームでも食事を楽しめるようになった時代、食事効果はどのゲームでも当たり前だ。

素っ裸になっていたのは他の影響を除外するためである。

「・・・HTB、どつかで聞いたことがあるような気がする」

どこかポンコツな雰囲気を漂わせているのはHuyu。

ツンツンしたのはWaterWave。

男っぽい性格をしているのはPeach。

「ああ、そうか。思い出したよ。君は最近活躍してるプレイヤーだったね。

HomomThreeBody。でも、君ノンケだったはずだけど？」

やべえよ・・・やべえよ・・・とHTBは思った。

こういったことが文明同士の駆け引きの材料になってしまふのだ。

「ああ、安心してくれ。このことは忘れるから」

「ありがとうございます」

その時、四人の近くを一頭の馬が駆け抜けた。

こういつた感じに馬が駆け抜けるときはたいいていマズいことしか起きない。

「修正パッチだ！修正パッチが配布されたぞ！」



騎手が叫んだ。

「……愁傷さまです」

「調べ直しなんて、レナそんなのいやー!」

WaterWaveはやけになってゆで卵を食べた。すると、彼女は消えてしまった。

「レポート効果があつたようだね」

「ふゆう……痴女扱いされちゃうよ」

この修正パッチは至る所で大惨事をもたらした。

とある文明では、あるガキ大将が友人に料理を振舞っていた。

現実世界における彼の料理はとても食べれたモノではないが、ゲームは違う。

ゲームだったらまだ何とか耐えることができた。

しかし、さっきの騎手が叫んだ。

「修正パッチだ!修正パッチが配布されたぞ!」

彼の料理を食べていた青狸とメガネと背の小さいお坊ちやまとヒロインは一瞬で白骨化した。

そのころWaterWaveは痴女扱いされていた。

この修正パッチは料理スキルを取っていない者にとっては災害そのものだった。

こうして、ほとんどの文明は滅びてしまった。

## ホモ逃げる

僕はホモとして生きていこうと思います 探さないでください

最悪の事態だ。ついにホモがノンケであることに耐えれなくなったのだ。

ほむらもレズだったが、我修院といえることも悪くないと思いつつあった。

しかし、先に耐えれなくなったのはホモの方だった。

よくよく考えてみたら、すでに前兆はあった。VRゲームでも様子がおかしかった。

我修院は何度も言うようにホモなのだ。資格なきホモなのだ。

そんな彼がホモであろうとすることは、核爆発を早めるようなものだ。

そこでほむらは電話をかけることにした。

もしかすると、魔法少女に監禁されているかもしれないからだ。

まずは巴マミにかけることにした。

「もしもし、マミ？ 我修院知らない？」

「し、知らない……らめえ！ 今、電話中なのおお！」

すぐに切った。マミは外れだ。明らかにノンケの男と一緒にいる。

「もしもし、杏子？ 我修院知らない？」



天使が現れた。

「あら、そんなほいほいと登場人物の前に現れていいの？」

「緊急事態ですからね。念のため、あることだけ伝えに来ましたよ」

「どうしたのよ？」

「今回だけは我修院さんを何度も蘇らせます」

「急に口調をまじめにしないでくれる？」

「・・・もう命が何個あっても足りないかもしれないんです」

「何が起ころの？」

「大惨事大戦ですね・・・これ以上は守秘義務があるので」

そう言つて、天使は消えてしまった。

我修院がどこに行つたのかという手がかりはない。

「困つたわね・・・」

困つたところで、どうしようもない。

「・・・井宮我修院を探してるの？」

振り返ると、知らない少女が立っていた。

「そうだけど・・・？」

「神浜市に来て。そこで運命を変えられるから」

そう言うと、少女は消えてしまった。

「神浜市って、確か近くの街よね？・・・うだうだしていても仕方ないわ。このままだと、我修院が危ないし、行ってみるしかないわね」

そのころ、我修院は後悔していた。

ついついノンケでいることができなくなつて失踪したが、

なぜかホモであろうとすることが難しくなつた。

いい男を見ても、いい男と思えないのだ。

とりあえずほむらのところに謝りに帰ろうと思つた。

しかし、駅でまどかを見かけた。

まどかの顔は一度目で彼を射殺した時の顔と同じだつた。

「どこかな我修院くん？出ておいで？ウエヒヒヒヒ！」

そういうわけで、全速力で逃げ去つた。

明らかにまどかは本能で我修院を追つてきている。

そうでなければ、この神浜市には来ないはずだからだ。

それはそうと、我修院はマギレコのことを知らなかつた。

だから、ここが神浜市レズタウンだということを知らなかつた。

「むう、どこか安全な場所に避難しないと」

ここは神浜市だ。安全な場所なんてない。

一人のホモは敵陣のど真ん中に取り残されてしまったのだ。

我修院はそのことに気づいていなかった。

まるで先輩の欲望に気づかなかったTONのようだ。

この街に一人のホモが迷い込んだ

新しい物語が動き出すだろう

どうか、このホモが僕の物語を壊さないように

「避けないでよー!」

「避けないでと言われて避けないホモなんていませんよ!」

「よし、そこだ!」

彼女の放った矢がホモを射貫く。

「うわあああ．．．あれ、僕生き返った?」

「えっ?」

## ホモがマジウスに助けられる、略してホモウス

ホモとレズは同類だ。だからこそ、同族嫌悪というものが生まれる。

正確に言えば、それはレズからの一方的な嫌悪だ。

どちらも同性愛だが、百合は美しく、薔薇は汚い。

ただ、それだけの話なのだ。

それでもレズはホモと同類だということに認めたららない。

さて、我修院は一晩中逃げ回って疲労困憊であった。

遠くの方でまどかの無邪気な声が聞こえる。

我修院がいるのは廃墟のビルなのに、彼女の声が何故か上から聞こえる。

「どこかなー？ウエヒヒヒ！」

何度射貫かれても、何度捕まっても、なぜか生き返ってしまう。

おそらく天使の配慮なのだろうが。

しかし、死というものは意外ときつい。

「このハーメルンを・・・うわあああああん！」

仕方ないので、動画を見て気を紛らわすことにした。



今のはとある作家の号泣謝罪会見の音声だ。

彼は何かの小説の11話で主人公のセリフを寝ぼけて間違えてしまった。

おかげで、避けるなど言われて避けるとかいう意味不明なことになってしまった。

今はもう修正されたが、読者からの信用はもう取り戻せないだろう。

ああ、どこからか綺麗な笛の音が聞こえる。

それは天国で何度も聞いたことのあるハーブの音と同じくらい綺麗だった。

また死が近づいているのだろう。

あゝ死よ。

「その御人、大丈夫でございますか？」

「はい、大丈夫でございます」

「大丈夫じゃございませんよね？血出てるでございますよ??」

というより、口調を真似しないでほしいでございます」

「大丈夫と言ったら大丈夫ですよ。君たち魔法少女よりは脆いとはいえ、

僕だって、一応は何度も死線をくぐってきたホモなので」

「・・・なんで私が魔法少女だとわかったでございますか？」

「知り合いに数人くらいいますから。その一人が上にいると思えますが」

どんどん声が近づいてくる。

「ホモなのに女性と一緒にいるんだね！嘘つきだね！」

声の大きさとその他諸々を考慮して、彼女はすぐ上のほうにすることがわかった。  
「・・・僕たちは嘘つきだっというのに」

彼は前世のことを思い出した。ミヨコはまどかに似ていた。

どこことなく雰囲気似ていたというレベルだったが。

普段見せる笑顔も、まどかにそっくりだった。

そして、今の状態も普通にそっくりだった。

「立てるでございませうか？」

「立ってどうするんですか」

「生きるんでございますよーほらー！」

少女は我修院をお姫様抱っこして、走り出した。

ホモがヒロインになつてる。略してホモイン。

「僕なんかを助けてどうするつもりですか！まどかさんからは逃げられませんよ！」

「いいから黙るでございます！ちゃんと生きて、それから死ぬでございます！」

「それパクリですよね!？」

攻撃が天井を貫いて飛んできた。

しかし、少女はそれを軽々と避ける。

「我修院はホモだけど男でしょ？恥ずかしくないの？ウエヒヒヒ！」

「ライダー助けて！」

「この世にライダーなんていないでございますよ！」

「そういえば、まだ名前言っていないですね！井宮我修院です！」

「私は天音月夜でございます！マジウスの翼という組織に入っております！」

「・・・マジウスの翼？」

「まずは逃げるでございますよ！」

月夜とホモはこうして逃げ切ることに成功した。

## ホモがマジウスに宣戦布告される、やっぱホモウス

三体オンラインはプレイヤーによって世界も違うし、レベルも違う。

柀ねむ、ID：Teilerは何度目かの三体艦隊の出発を目にした。

この前の修正パッチは多くのサーバで大災害をもたらした。

しかし、Teilerの文明はもはや料理スキルを必要としなかった。

だからこそ、修正パッチの災厄から逃れることができた。

「・・・相変わらず、素晴らしい叙事詩だね」

三体オンラインは常にTeilerの心を虜にしてきた。

さて、彼女はログアウトして、現実に戻った。

そういうわけで、ここからは柀ねむと本名で呼ぶことにしよう。

「ねむ様！報告があるでござい・・・報告があります！」

部屋を出たねむに話しかけたのは白羽根の天音月夜だった。

「先程、私達魔法少女の存在を知っている一般人を保護しました！」

キュウベえのことも見えるようござい・・・見えるようです！」

ねむは衝撃のあまり固まってしまった。

キュウベえは魔法少女やその素質のある少女にしか見えないはずだ。

「・・・その、一般人は男性かい？」

「はいー！」

男性で魔法少女やキュウベえのことを知っている人間は二人しかいない。

一方は里見灯火の叔父である里見太助だ。もう一方は・・・。

「・・・年齢は？」

「私より年下です」

「・・・そうか」

どうやら里見太助ではなさそうだ。そうならば・・・。

「・・・その人の特徴は」

「ホモです！」

「そうか・・・もう一回言ってくれるかい？」

「ホモです！」

「・・・そうか。ついに来たか。灯火には絶対会わせない方がいいな」

灯火の父はホモが嫌いだった。生産性がないからだ。

そんな父の娘である灯火もまたホモが嫌いだった。

「ここに連れてきてくれ。Vスーツをもう一着用意するのも頼む」

「わかりましたでござい．．．わかりました！」

気付くとホモは仮想空間にいた。

仮想世界とわかったのは、ログを確認できたからだ。

それに、明らかに日本ではなかったからだ。

腰かけているのは海辺の緑地で、そこかしこにスイカが生えていた。

紺碧の空を見上げれば、金色の丸い月がかかっている。

陸地の方を見ると、平原の向こうに雪をいただいた山々があった。

とても高く険しく、神の剣のように、あるいは地球の長い牙のように鋭く切り立っている。

海の方を見ると、島があり、明かりが見えた。

都合のいいことに、小舟があったので島に渡ることができた。

島に上陸すると、そこには金閣寺があった。炎を纏っていた。しかし、燃えていなかった。

ただ、炎を纏っているだけだ。

「井宮我修院くんだね？」

少女が彼の前に姿を現した。

「月夜から話は聞いている。君がホモだということも知っている」  
彼女は周りを見渡した。

「やっぱり君はホモだね。この世に名を馳せた文豪たちは皆ホモだった」  
「どういうことですか・・・？」

「この仮想世界は君の心象風景を投影して作られている。

つまり、この世界は君の感性そのものなんだ！」

その時、鮮やかな橙色の光を放つ銀灰色の円盤が空から現れた。

「実に素晴らしい。今すぐにも仲間にしたいくらいだ！」

でも、君はあまりにも人道的過ぎる。ホモとしても、僕たちに関わる一般人としても  
だ」

少女は炎を纏った金閣寺を指差した。

「あれは決して燃えないだろうね。ただ、炎を纏っているだけだ」

少女は金閣寺に触れた。だが、炎は彼女に燃え移らなかつた。

「ホモビの美学は意地汚いだけじゃなく、人道的でもない。

本来の滅びの美学だって人道的じゃない。人や物の死を必要とするからね。

でも、君の心象風景では金閣寺は燃えない。それにあそこを見てくれ」

少女はさつきまで我修院がいたところを指差した。

そこには四人の人間がいた。おそらくAIだろう。

子どもたちはスイカ畑を楽しそうに世話して、大人たちがそれを微笑ましそうに見ている。

「希望というのは偶像なんかよりも、ずっとずっと手に入らない。

君は希望というものを愛しているんだろう？ だったら、それを手に入れる難しさはわかるはずだ」

転生という状況に巻き込まれたホモを支えたのは希望だった。

それは彼が少女ではなくホモだったからこそ、持ちえたもの。

「でも、君は犠牲無くしてそれを手に入れようとしている。

燃える金閣寺は美しい。でも、君の金閣寺は燃えていない。

むしろ、笑い話だね。僕だったら遠慮なく燃やすだろう」

我修院は一言だけ言った。

「それは法律違反ですよ」

少女は豆鉄砲を喰らったような顔をした。

「……ハハ……ハハハ！なるほど！確かにわからなかったわけだ！

さつきからこの世界に違和感を感じていたけれど、それが今理解できた！

この世界は調和しているんだ！法律ルによってね！



プログラミングされた法則<sup>コード</sup>だけじゃ成り立たないはずだよ。

まったく・・・不快だね。僕たちはキュウベエの定めたルールから抜け出そうとしてる。

アレの定めた残酷なルールを破ろうとしてるのに、今更国の法律<sup>ルール</sup>を守れと？」

我修院は少女の口ぶりから、彼女が人道的にアウトなことをしていると察した。

「・・・法律<sup>ルール</sup>だけじゃありませんよ。

この世界は道徳<sup>モラル</sup>によっても成り立っているんです」

道徳<sup>モラル</sup>、それは我修院が持つていて、ホモビのホモが持たないもの。

この仮想世界の調和性は法則<sup>コード</sup>、法律<sup>ルール</sup>、そして道徳<sup>モラル</sup>から由来していた。

さらに言えば、その三つは人間が人間である最低条件だった。

つまり、ホモは人間ではない。ということとは、野獣先輩は人間ではない。

「・・・君はアバ<sup>道徳の体現者</sup>バトルにでもなるつもりかい!?

呆れるしかないね!この残酷な世界でアババトルになることほど馬鹿げたことはないのに!」

「この世界だからこそですよ」

「・・・それが君の意志か。よくわかった。今の君にマジウスになる資格はない。

僕たちの計画は一般人にも危害が及ぶ。でも、それは魔法少女の救済のためなんだ。

もし君がマグウスだったら、何も変わらないだろう。ただ、時間だけが過ぎてゆくだけだ。

でも、今ならまだ間に合う。君の持っている倫理観を捨てるんだ。

それだけで、君は多くの少女の命を救うことができるかもしれない」

ここで我修院には選択肢が与えられた。

だが、その選択肢はもはや選択肢ではない。

選択肢が三つあろうが、我修院にはどれも同じだった。

まるで L o b b o t o m y C o r p o r a t i o n のごとく。

断る

断る

断る

「・・・それが君の返事か。残念だよ」

「申し訳ありませんね」

「君がその気なら、こつちにも考えがある。

君に宣戦布告しよう。勝負は明日からだ。

勝利条件は簡単だ。君が僕たちの計画を阻止すること。

敗北条件も簡単だ。君の手で魔法少女を殺すことだ」

簡単そうで、意外と難しい条件だった。

彼は別の時間軸で巴マミを殺したことがある。覚えてない読者は窓際に行くこと。

だが、我修院には関係なかった。

「受けて立ちます」

「そう言うと思つてたよ。僕は終ねむ。」

またいつか、聞かない場所で会うことになるだろうね」

目が覚めると、そこは神浜市のとある公園にあるベンチの上。

あれは夢だったのだろうか？ いや、あれは現実だった。

スマホで時間を確認した。天音月夜に助けられてから数時間。

勝負は明日から。彼女たちの計画を阻止しなければならぬ。

しかし、その計画が何なのかさえわからない。でも、不安などなかった。

## 番外編：あの時間軸は今？

### 最初の時間軸

「まどか！もうやめてよ！」

「何言ってるのさやかちゃん？まだ始まったばかりだよ？」

ママさんがホモった時間軸

志筑仁美は危機に直面していた。親友がホモになってたからだ。

「KYSKくんばかりずるいです」

「非常に新鮮で、非常に美味しい」

その二人が、少しずつ仁美に近づいている。

二人は彼女をホモにしようとしていた。

「ふ、二人とも、もう少し冷静になってください！」

しかし、二人は既に正気ではなかった。ホモは正気ではないからだ。

「もうフォークが持てないよ……」

「THE・もっとたっぷり付けてやれお前も（SIMPLE2000シリーズ）」

なお、作者は吐き気をこらえながら書き起こしからコピーしている。そんな勇猛果敢で支離滅裂な作者に拍手を！

さて、仁美は逃げようとしたが、石につまづいてしまった。

また次の再走でお会いしましょう。オエエエエ！

「ンンッ… マ。ッ！ア。ッ！→」

あまりにも食事中には酷いシーンなので別の視点に移動しましょう。

中沢とまどかがベンチに座っていますね…。

二人は幸せなキスをして終了。

終わり！閉廷！以上！みんな解散！

魔法少女おりこ☆マギカの時間軸

世界中がパニックになったが、少しは落ち着きを取り戻しつつあった。

しかし、別の理由で暴れようとした連中が現れた。

天使はそれを我修院には見せなかった。それは賢明な判断だった。

「…そ…をどきなさい、小娘」

かつて見滝原中学校があつた場所にはホモの墓があつた。

遺体はないので、ただ墓標だけ立てたようなものだったが。

ぶっちゃけ、ほとんどの人たちはホモのことを忘れたがっていた。

だから、忘却のために墓を作ったというのもまた事実だ。

しかし、このホモが世界の滅亡を決定づけたのは確かだ。

この時間軸にもやはり紅晴結菜は存在して、ホモに対する復讐をしようとしていた。彼女を含め、多くの人間の未来に対する希望はホモのために潰されたからだ。

「どかないよ……！」

千歳ゆまはホモのいた証拠を守ろうとする者たちの一人であった。

「アンタ、どうしてその殺人鬼を……」

「我修院は人殺しじゃない！」

ホモに育てられたゆまにとって、我修院は杏子と同じように親代わりでもあり、彼女にとつての人間の鑑でもあった。全国のホモは見習うように。

「……その子の言う通りだ。アイツは殺人鬼じゃなかった」

煌里ひかりを何とか撃退した中沢が言った。

魔法少女やら何やらの存在が暴露された後、人類の基礎科学は急激に進歩した。

キュウベエの文明の技術は生活科学や宇宙開発、そして対魔法少女装備に転用された。

だから、中沢のような一般人でも魔法少女を倒せるのだ。

「ただの、ホモだった。確かに、ほむらと一緒にいるくせに、俺に視線を向けてたけど、それでもあいつは良い男だった！何も知らない奴が殺人鬼なんて言うんじゃねえ！」  
しかし、ゆまや中沢が何と言おうと、もはや無駄な抵抗に等しかった。  
魔法少女ではない人間たちがここまで善戦できたのは奇跡だった。

「じゃあ、死になさい（暗黒微笑）」

結菜の金棒がゆつくりとゆまに振り下ろされた。

しかし、その金棒はゆまに当たる直前に弾き飛ばされた。

「……井宮我修院の墓を破壊することは反人類だと習わなかったの？」

「そいつを殺した奴に言われたくないわ、美国織莉子。いえ、今は羅織莉子<sup>ルオ</sup>だったかしら？」

「その話は今はどうでもいいわ。とりあえず、今日は機嫌がいいから見逃してあげる。

とつとつ、そこに伸びてる子を連れて、家に帰って頭を冷やしなさい」

「……本職が来たらめんどくさいわね。逃げるわよ、ひかる」

「結菜さん、すみませんっす……」

こうして、今週も井宮我修院の墓を守り切ることに成功した。

タイムボカンのように、隔週で攻撃対象となるのだ。

「二人ともお疲れ」

「今日も大変だったの！」

「まったくですよ。ここまで我修院のことを皆が恨んでるなんて……」

どのくらい皆が恨んでいるかというと、マギレコに出てくる魔法少女組織全部が恨んでいる。

別時間軸で神浜マギアユニオンの一員となるはずの魔法少女の半数もそれに該当する。

ホモの所為で地球がバーン（隠喩）となつてバーン（隠喩）となることが定められたからだ。

作者もこの時間軸で生きていたら、ホモを確実に恨んでいたことだろう。

「先週はプレイアデス聖団が総攻撃を仕掛けてきましたからね……」

「あの時は怖かったの……」

先々週は時女一族、三週間前はネオ・マギウス。

ちなみに、この時間軸のネオ・マギウスはマギウスの後継団体ではない。

少しややこしいが、ネオとついているだけだ。やっぱり魔法少女至上主義である。

そんな彼女たちにとってホモというのは存在だけでも忌々しいものだった。

「それはそうと、結婚おめでどういぎいます」

「おめでどうなの！」



「おかげで、あの人はさらに暗殺されそうになったけどね」

美国織莉子、現在は羅織莉子である彼女は結婚した。

相手は相談役の中国人社会学者であった。

「どうも羅<sup>ルオ</sup>輯<sup>ジ</sup>です。三体Ⅱの主人公です。結婚しました」

「おめでとうございます。じゃあ、死のうか（暗黒微笑）」

「出産はいつの予定ですか？じゃあ、死のうか（暗黒微笑）」

「おっと、記者の皆さん。本性現したね？ついにマイクじゃなくて銃口を向けてきたね」

もともと、中国人である彼が日本の魔法少女たちを治める織莉子の補佐に着いたのもマズかった。

結婚したのもマズかったし、織莉子が名字を変えたのはさらにマズかった。

「おかげで、美国の奴らがあの人を殺そうとするから困ってるのよ」

（（ついに奴ら呼ばわり・・・））

もちろん、織莉子も負けじと美国の半分を反人類罪でしよつ引いた。もちろん、冤罪である。

「キリカも大史も護衛についているけど、あの人もだいぶ成長したわ」

そのころ、記者たちの攻撃を乗り切った羅輯は時女一族から追われていた。

「まあ、あの人は意外としぶといから大丈夫でしょう。それはそうと、休暇を取りなさ

い。

ほら、宿泊券もあげるから。もちろん、代理も用意しているからね」

「えっ、いいの!?!」

「・・・あの」

「中沢、隠しても無駄よ。付き合ってるのは知ってるんだから?」

「ごめんね、中沢君」

「自分したのはゆまだった。」

「一つだけ言うわ・・・あなたロリコンだったのね」

「中沢は呼吸困難に陥った!」

「代理はちゃんとした人だから安心してね」

「代理の章ジャン・ペイハイ北海だ」

「同じく代理の呉ウー・ユエ岳です」

「中沢とゆまは驚いた。」

「呉岳って・・・確か作者がリリなの二次創作の主人公にしたけれど、運営にオリ主扱いされて、オリ主タグを付けられてしまったあの呉岳!?!」

「すごい!サインください!原作(三体Ⅱ)でも不遇の呉岳さんサインください!」

呉岳は全治三時間の精神的外傷を負った。

まあ、何はともあれ、滅亡を待つ世界でもこのようにのんびりとした日常が存在したのだ。

数年後、中沢くんは千歳くんにジョブチェンジした。おめでとう。